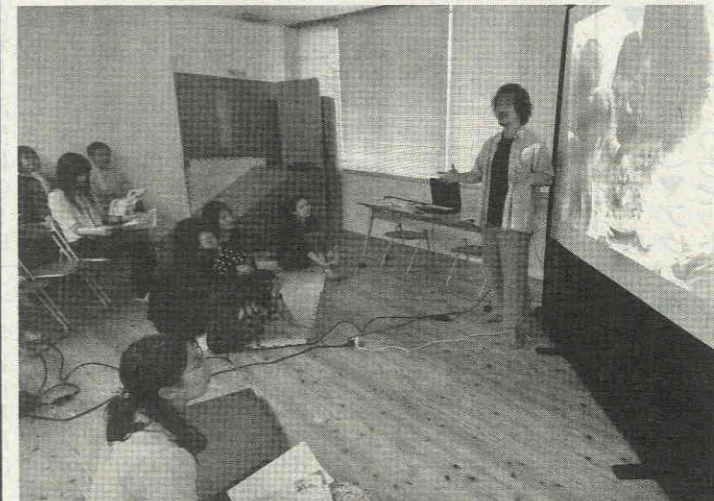


# 復興へ力を「どっこいしょ」

## アジ被災地おもちゃ支援報告

東日本大震災の被災地の子供たちにおもちゃを届けたNPO法人「アジール舎」(亀口公一会長)が5日、宇治市横島町にある法人の活動拠点「ころぼっくるの家」で、報告会を開いた。現地向かった法人会員の話しに、参加者が聞き入り、今後の被災地支援を考えた。

同法人は発達に「つまずきを持つ子供たちの療育支援」を行っており、被災地の子供たちが心から求めている「遊びとおもちゃ」の大切さに注目。3月下旬におもちゃを一般募集したところ、10日間で国内外から数千点が寄せられ、法人会員の藤井将さん(41)と東京都が4月、仲間とともに7人で福島県会津若松市



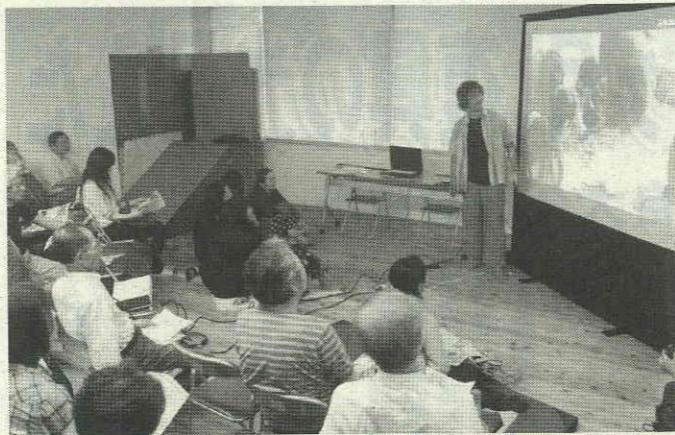
被災地に関する藤井さんからの話聞き入る参加者たち

内の避難所2カ所などに届けた。報告会は「次の展開への出発点にしたい」と(亀口会長)との願いで企画。藤井さんは津波の跡が残る宮城県

仙台市沿岸部や南三陸町などの状況をスライド上映で説明した。おもちゃ支援で、段ボール箱計19箱分を持参したことを伝えた。大勢の人々から寄せら

れたおもちゃで、当地の子供たちが遊んでいる様子も紹介した。同行メンバーの女性は、子供たちの前で披露したエプロンシアターを発表し、エプロンのポケットから愛らしい人形を取り出しながら「おきなな」を上演した。藤井さんは今後の支援について、人間や動物が協力してカブを引き抜くストーリーになぞらえ、「立場を越

えうんとこいしょ、どっこいしょ」で一つの目標を掲げたい。何が出来る」と力を込めた。



被災地の福島県におもちゃを届けた時の状況を報告する藤井さん(ころぼっくるの家)

# 被災地の子どもとつながろう

## 宇治ころぼっくるの家 おもちゃ届け隊が報告会

子どもの発達支援などに取り組んでいるNPO法人アジール舎「ころぼっくるの家」(宇治市横島町大幡、亀口公一会長)が5日、東日本大震災の被災地にいる子どもたちにおもちゃを届けたスタッフを迎えた報告会が開かれた。

「ころぼっくるの家」は「共に生き、共に育つ子どもたちへ」を合言葉に3年前にオープン。発達に「つまずきや問題を抱える子どもを対象に児童アセスメント」の活動を行っている。

「子どもは臨床発達心理士として長年にわたって子どもと向き合ってきた。児童アセスメントは、児童アセスメント法による支給決定児童とその家族が対象だが、発達のおもちゃや混乱をほぐし、早期療育で二次的障害を未然に防ぐため、「可能な限り就学で切れることがないよう」にしたい」と、利用年齢を概ね2歳〜8歳まで幅を広げて運営しているのが特徴だ。

震災発生以来、亀口さんが気にかけているのが、震災で傷ついた子どもの心身を癒すために必要な「遊びやおもちゃ」のこと。赤ちゃんにミルクとオムツが必要なように、小さな子どもたちは「遊びとおもちゃ」を求めている。避難生活においては子どもたちは自分が必要とする支援を求める力がない。被災直後は親がそばにいれば厳しい環境変化にも子どもはそれほど動じないが、長期化した親自身が疲弊した時には子どもの心的な傷は深くなる。だからこ

そ、我々が声なき声に伝える支援をしなければ」と、避難所におもちゃを届ける活動を始めた。報告会では福島県会津若松市にアジール舎からのおもちゃを届けた藤井将さん(41)とアジール舎会員が、現地の様子をスライドを交えながら報告した。藤井さんは「おもちゃだけを与えても、子どもはすぐに飽きるが、一緒に遊び始める子どもたちは少しずつ心を開いてくれる」と。何よりも子どもたちは人と関わることを求めているように思う」と指摘。震災を期に地域コミュニティが少しずつ崩壊し、「それまで日常だった周囲とのつながりが失われつつある」と、将来が見えない不安とあいまって、子どもの心に暗く陰を落としているように思える」として、おもちゃというモノだけでなく、生身の人間が関わり続けること「のありようが問われている」と述べた。

【岡本幸一】